



明るく温かい、ラテン的な大阪の街と関西大学

読む人によって変わる小説は読者との共同作業

西 加奈子 ◆作家 + 河田 悌一 ◆学長

2008年度の織田作之助賞大賞を受賞した西加奈子さんは、関西大学法学部の出身。受賞作『通天閣』で、西さんは大阪の街について、「なんて温度の高い街だ」、「生きている人間の、匂いがした」と作中人物に語らせている。大阪の街と人、学生時代、関西大学のこと、作家活動のことなど、河田学長との話は尽きない。

大学生活は高校時代のような閉塞感もないし、かといって社会人ではなく、人生のアマチュアの時期だから、いろんなことに敏感になれるのだと思います。

◆カイロの小学生の遠足はピラミッドへ

河田 織田作之助賞大賞受賞作の『通天閣』は、大阪を舞台にした心温まる小説です。私も同賞の選考委員の一人ですが、庶民の街・大阪に生きる人たちの体温や息遣いが感じられるこの作品が満場一致で選ばれたことを、とてもうれしく思いました。西さんはイランのテヘランに生まれ、エジプトのカイロで育ったという異色の経歴の持ち主です。まず、子ども時代のことから聞かせてください。

西 テヘランにいたのは2歳までだったので、何も記憶にありませんが、カイロで過ごした小学生時代のことはよく覚えています。日本人学校には運動場もなく、体育の時間は道路にマットを敷いてやっていたね。ときどきヤギがやって来ると、慌ててマットをどけて通ってもらい、残されたうんこを片付けてまた運動再開。前の空き地で駆け回り、遠足はピラミッドへ。今から考えたらとんでもないぜいたくなんですけれど、やっぱり日本に帰りたいなあと思っていました。

河田 日常生活は日本語ですか。アラビア語はできるのですか。
西 家では大阪弁、学校では東京弁でした。アラビア語はしゃべれませんでしたけど、フラットと呼ばれるアパートの地階に住んでいた管理人さんの子らと一緒に遊んでいました。金持ちの日本人の子どもを、床に水がたまっていてゴキブリもネズミもいるような家まで無邪気に連れていってくれました。

小学校5年生までカイロの日本人学校に通い、11歳のときに帰国しました。あんなに帰りがかったのに、日本の学校ではけっこうカルチャーショックもありました。マラソンでも全力で走らないとか、女の子は連れ立って二人でトイレに行くとか、先生に聞かれて分かっているけど誰も手を挙げないとか……。予想外のしんどさでしたけれど、わりと器用なほうだから慣れました。ただ、中学生だった兄はなかなかなじみませんでしたね。

◆柴田元幸訳でアメリカ小説に親しむ

河田 関西大学を志望し、なかでも法学部に入学された理由は？
西 高校の友達と連れ立って関大へ行ったとき、駅からキャンパスまでの通りがめっちゃ面白そうで、みんなで「絶対にここへ来ような」という話になったのです。もともと文学部志望でしたけれど、とりあえず関大の学部をかたっぱしから受けました。法学部にも合格したら、文学部よりも法学部のほうが賢そ

うだと言われたり、映画に出てくる弁護士のかっこよさにあこがれもあって、法律をやるかと。しかし、難しくてすぐに挫折してしまいました。

河田 あの関大前通りには、この大学に来たいと思わせる魅力があるんですね。いわゆる大学街、大学通りが東京でも京都でも、だんだんなくなってきているから、学生の街ということで、受験生に対するアピールポイントの一つになるかもしれませんね。関西大学で学生時代を送ってよかったと思うことは？
西 明るい大学で、すごく楽しかったイメージがあります。シネ5(ファイブ)という映画のサークルに所属し、単館系の映画ばかり観ていました。みんなで飲みにいったり、夏休みには旅行をしたり、ちょっとした撮影もしました。サークルのメンバーに限らず、大学がでかいからいろんな人と出会うことができたのはよかったですね。今も大阪に帰ったら、大学時代の友達と会うのが楽しみで、話しているとあのころに戻った感じがします。大学生活は高校時代のような閉塞感もないし、かといって社会人ではなく、人生のアマチュアの時期だから、いろんなことに敏感になれるのだと思います。

河田 僕は小さいころ映画評論家になりたいと思ったことがあるのですが、西さんはいつ作家になろうと思ったのですか。また、大学時代はどんな作家が好きでしたか。

西 学生のころ、まだ小説は書いていなかったのですが、本はよく読んでいました。アメリカの黒人作家で、また女性作家としても初めてノーベル賞を受賞したトニ・モリスンの『青い眼がほしい』という本に出会い、衝撃を受けたのが16歳のとき。それから英米文学を好んで読むようになりました。大学に入ってから、文学部の友達に「英米文学だったら柴田元幸訳で読むと面白い」と教えてもらったのがきっかけで、柴田さんが訳したものばかり読んでいました。ポール・オースター、ステューブン・ミルハウザー、スチュアート・ダイベックなど、柴田訳で探していろいろな作家に出会ったという感じです。海外文学を選ぶときには翻訳者で選んだらいいという書評家がいるから、すごいなあと思いますね。

◆「ちよいワルおやじ」よりかっこいい？

河田 昨年の11月に東京で織田作之助賞の創設25周年を記念する座談会を、関西大学と毎日新聞社の主催で開催しました。作家の辻原登さんと西さん、私の3人がそれぞれ関西の魅力キーワードを表すことになったとき、西さんは「平仮名が似合う」、「時代に迎合しない」、「シャイネス(照れ)とつつこみ」の三つを挙げました。私は京都で生まれ育ちましたが、王朝の街、京都の人はどちらかというと本音を隠して格好をつけたがる。大阪人のほうが本音で生きている感じがして、私は好きですね。



■対談

西 オダサクの主人公もそうですけど、徹底的にかっこいい人や粋人ではなくて、ちょっと情けないところのある人が多い。「夫婦善哉」の蝶子さんも、太宰治の小説に出てくる女の人と同じように男の人を支えているけれど、すごくピュアで本当にいい女というよりも、ちょっとずるいところや不細工なところがある。

関西人独特のシャイネスで、かっこつけてるやつを「いきっとる」といい、自分自身にもツッコミを入れたりする。おっさんは堂々とおっさんで、「ちょいワルおやじ」みたいなおっさんはあまりない。若者におもねらないとか、独自の道を行っていて、そこが逆にかっこいいと思います。かっこ悪いところがかっこいい、そんな文化があるんじゃないかなと思います。

◆大阪の街も関大も明るく温かい

河田 東京と比べると、大阪の街や風土の特徴がよく分かります。東京では、「かみしも」を着ているような人が多い。その職業に合わせて、例えば外務省のお役人は、大学の先生は、学長はこうあるべきだ、こういうふうにしなないとかんという何か既成概念があって、それに合わせて生きているような感じがするのです。西さんは今、東京にお住まいですね。

西 東京に移ったのは25歳のときです。たまに大阪へ帰ると、

人との距離感がすごく近い感じがします。原始人に近いというか、動物っぽいですね。東北の文化の影響を受けている東京に対して、大阪はカリブ海あたりの明るさがあります。あのノリはラテンですよ。東京と大阪の違いは、ヨーロッパに行ったときと南の島に行ったときの感じかな。東京がニューヨークに似ているとすれば、大阪はマイアミやジャマイカ、バリ島という感じがします。

その半面、何かを成したいというときには、大阪はちょっとぬるいかも。東京だと「みんな頑張ってるし、私も頑張らな」となるけど、大阪やと「とりあえず今日からやるつもりやったけど、あさってぐらいからでもええかな」と(笑)。

河田 日本語の弁論大会に出た留学生がこんな話をしていました。地下鉄の切符の買い方が分からなくて困っていると、「あんたどこ行きたいの?」と聞いてくれて、乗り換える道順も丁寧に教えてくれたうえ、「分からなかったら、ついていってあげよか」と言ってくれた。大阪の人はすごく親切だと。

関西大学には全都道府県から学生が来ていますが、大阪に住んで寂しい思いをすることはないでしょう。困っていたら手を差し伸べてくれる人間的な優しさが、大阪の街にも関大にもあるように思います。高校生たちには、関西大学が「温かい大学」であることをアピールしたいですね。卒業生を対象に大学時代の満足度を調べたら、関西大学の点数がかなり高いのです。関西大学に入学してよかったという人が多く、来て損したという人はあまりいません。

◆通天閣の上から昔の自分の姿が見えた

河田 ところで、受賞作となった作品は、大阪城や中之島や心斎橋ではなくて、どうして通天閣を舞台にしたのですか。

西 四天王寺に住んでいたとき、通天閣は身近な場所だったのです。バイトに追われる貧しい生活で、睡眠不足が続き、お化粧もできない洋服も買えなくて、すごくみじめやったんです。考え込むと内向するほうなので、脳みそがぐちゃぐちゃになるのを防ぐために、よく通天閣に登っていました。東京タワーほど高くなくて、あの高さやったらああいう景色やろなという、予想通りの景色が目の前に広がっていました。そこで脳みそをクリアにして、また自転車を立ち漕ぎして坂道を帰っていきました。

その2年後、出した本が売れて生活ががらりと変わったのです。実家に帰ったときに友達と通天閣へ登りました。たった2年で自分の環境や感情が変わっていて、あの坂を昔のみすぼらしい自分が自転車を懸命に漕

いで上がっていく姿が見えるようでした。その自分に「もうあと2年たったらどえらいことになってんで」と言ってやりたいなと……。そんなことを編集の人と飲みながらしゃべっていたら、「それを書いたら」と言われたのがきっかけです。

◆関西大学に新学部・新キャンパス誕生

河田 関西大学は、西さんが学ばれたころとは随分変わりました。今年4月に11番目の学部として、外国語学部を開設します。英語教育、中国語文化、外国語コミュニケーションの3専修で、2年次には「スタディ・アプロード」というプログラムを設け、全学生が海外の提携大学に1年間留学することを必修としています。

2010年の春には、JR高槻駅前に新キャンパスができます。社会安全学部と大学院社会安全研究科を設けます。地震などの自然災害から人為的な事故まで、幅広く防災・減災、安全・事故防止、危機管理などを学べる全国初の学部です。同じ敷地内に小学校も開校し、中学校、高校までの一貫教育を行います。

また同時に、堺市に健康文化学部も誕生します。スポーツ、身体文化、健康福祉のほか、ユーモア科学すなわち笑いをテーマに据えています。社会学部の木村洋二教授が笑いを数値化し、アツハ(aH)という単位で表す「笑い測定機」を開発されました。笑いを健康や社会福祉に役立てるのは、関大にふさわしい試みでしょう。

西 それは面白いですね。人間生きているかぎり、笑っている時間が多いほうが幸せなので、それはすごくいいことだと思います。

◆自分は自分、変身しなくてもいい

河田 西さんの場合は、大阪に戻ってきたら今も親しく話し合える学生時代からの友達がいらっしやる。大学時代に出会って深く付き合った人は、一生の友人になりますね。そういう意味でも、関西大学で学んでもらってよかったと思います。最後に、これからどのような作品をお書きになるのか、少しお聞かせください。

西 「変身する小説」は絶対に書きたくないですね。今、あなたは変われるんだというようなメッセージを伝える風潮があるような気がします。けれど、そのように今の自分を否定するのではなく、自分は自分やから変わらなくても、ちょっとした気持ちしだいで、人と出会うという小さなことでも違ってきます。

『通天閣』も、小説の冒頭と最後で、置かれている状況は変わっていないし、何かを手に入れたというわけではありません。頑張ってる変身しろとか、インドへ行け、みたいなんじゃないです。代わり映えがしなくても、とりあえず親と話しているだけでも、人にありがとうと言うだけでも、気持ちが変化することもあります。

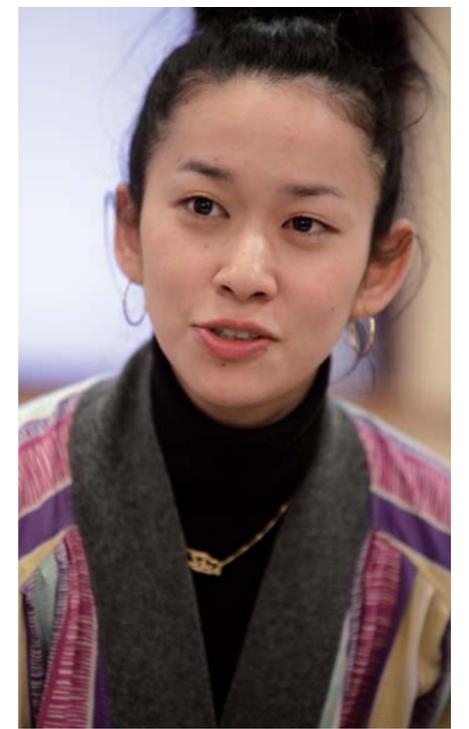
小説は、読む人によって変わるもの。もちろん、読者の方には幸せになってほしいし、元気になってほしいけれど、それはこっちから言うことではないと思います。それは作家側から発信することではない。そこが小説のいいところで、小説ってただの黒い文字が並んでいるだけ。読者がどんな感性を持っているかで、がらりと変わるのです。それを作者が全部色づけることはしない。そんなふうにとったんやということもあるし、共同作業感があるのです。書いているときは孤独ですけど、本になって出たあと、作品が変わっていく感じがすごく面白いのです。

河田 西加奈子という若手の有望な小説家が、大阪から、関西大学から出現しました。人間的な魅力のある作家として大成する人だと信じています。頑張っている作品を書き続けていってください。

小説ってただの黒い文字が並んでいるだけで、読者がどんな感性を持っているかで、がらりと変わるのです。



河田 梯一(かわた ていいち)
1945年京都市生まれ。大阪外国語大学中国語学科卒業。大阪大学大学院で中国哲学を専攻。86年関西大学教授。文学部長、副学長を歴任し、2003年10月学長に就任。1991年に在外研究員としてプリンストン大学で中国思想史を研究。文部科学省中央教育審議会臨時委員。同省大学設置・学校法人審議会委員。社団法人日本私立大学連盟常務理事。財団法人大学基準協会副会長。



西 加奈子(にし かなこ)
1977年テヘラン(イラン)生まれ。2000年関西大学法学部卒業。フリーライターなどを経て、04年「あおい」でデビュー。05年「さくら」が大ベストセラーとなる。08年に『通天閣』で第24回織田作之助賞大賞受賞。小説に「きいろいソウ」「しずく」「こうふくみどりの」「こうふく あかの」、エッセーに「ミッキーかしまし」など、多数の著書がある。